

## ～人の生老病死と高所環境-「高地文明」における医学生理・生態・文化的適応～

編集・発行：高所プロジェクト文化班アルナーチャル研究グループ（今号編集：宮本真二）  
 住所：〒603-8047 京都市北区上賀茂本山 457-4 総合地球環境学研究所  
 研究プロジェクト・ホームページ：<http://www.chikyu.ac.jp/high-altitude>

## ■Geography■

## 陸封国家・ブータン王国

河合 明宣（放送大学）

Landlocked は、簡単な英和辞典では、「(国・湾など) 陸地に囲まれた；(魚が) 陸封された淡水に住む。」と日本語に訳されている。国語辞典では、「陸封」は海または海と陸水を生息域としていた水生生物が、何らかの理由で陸に閉じこめられて海や陸水にも戻れずに世代をくりかえし場合、陸封されたことになる」と説明される。『大辞林』（三省堂）でも「陸に囲まれた」という意味は無い。海に囲まれた日本列島の国土条件からか、陸地に囲まれたという意味の使用は皆無と言える。狭い列島内に生息するイワナなど水生生物の一部の特殊な生活史を表現する言葉としてのみ使用される。

毎年刊行される『ブータン便覧』の国土の説明では、「陸に囲まれた」点が次のように強調されている。

Bhutan is one of the Asia's smallest nations, *landlocked* between the extensive borders of the two great populous nations of China and India...It has 470 kilometers long bordered by Tibet (China's Xizang Autonomous Region) to the north and northwest and 605 kilometers with Indian state of Sikkim to the west, West Bengal to the southwest, Assam to the south and southwest, and Arunachal Pradesh to the east. Indian state of Sikkim, which measured eighty-eight-kilometer-wide territory, separates Bhutan from Nepal, while West Bengal separates Bhutan from Bangladesh by only sixty kilometers. The border with Tibet is traditional following the watershed of the Chumbi Valley in the northwest and the crest of the Himalayas in the north while, the southern border with India was established by treaty with British in the nineteenth century and basically follows line made the Himalayan foothills with the plains (RGOB, National Statistical Bureau, Statistical Yearbook of Bhutan 2009, p.v).

ブータンはヒマラヤ南斜面、北にチベット（中国）、東西及び南でインドと国境を接する「陸封国家」(landlocked country) である。面積 38,394 平方キロ、人口 671,083 人（2008 年）の小国である。面積では日本の 10 分の 1 程度、人口では約 200 分の 1、人口密度は、僅か 17 人である。

周囲が他国に完全に包囲されているという地政学的環境は、グローバル化が進む今日ではブータンの国家運営を、一層強力に規定している。膨大な国境の管理は不可能である。人の越境が自由で、しかも物流に対して関税による国境措置が極めて難しいため、経済政策や多民族構成における国民統合（「国民国家の形成」）の困難さを常に抱えている。それどころか紛争になれば、強大な隣国地上部隊の越境攻撃（外交と国防）、そうでなくとも隣国が国境を厳しく管理すれば、人の移動と物流が遮断される。食料輸入依存の国では飢餓の危機に曝される。産業革命以降の高度工業化社会の「繁栄」は、情報、人材、物流に関わる自由貿易に支えられている。しかし、「陸封国家」は、国境を接する諸国にヒト、モノ、カネに関わる物流の生命線を握られる。また同時に、多くの場合グローバル化からも遮断される（注 1）。

「陸封国家」チベットやシッキムの例に照らして、かかる条件下でブータンが独立を維持しえた原因は、中国・インド（英領インド）2 大国の国境に挟まれて生じた均衡である。2002 年の 173 か国の人間開発指標（HDI: Human Development Index）を比較し、HDI が低い国は陸地に囲まれた国に集中しているという国連の研究（Faye, Michawll. L., et al., The Challenges Facing Landlocked Developing Countries, “Journal of Human Development”, Vl. 5, No. 1, March 2004）で、HDI 最下位 12 か国中 9 か国が「陸封国家」であると指摘された（注 2）。かかる国家はアフリカに集中し、東南アジア・南アジアでは、140 位のブータン、143 位のネパール、143 位のラオスの 3 国である。同研究によれば、主要な要因は輸入財価格が高い輸送コストを含み高額になることであ

る。ブータン、ラオス、Swaziland (南アフリカ) は、隣国との貿易に集中しこのコスト高を軽減しているとされる。

陸封されて特殊の生活史(生態資源・人間関係)を持つブータンでは、低酸素・過剰な紫外線などの高所環境に加え、グローバル化の遮断の度合いを測る必要がある(注3)。

注1: ビーター・ホップカーク『チベットの潜入者たち—ラサー一番乗りをめざして—』白水社、2004年)は、中国掌握1959年以前の状況を活写している。「中国の侵攻を受けるまで、チベット人のシンプルな生活様式は、中世以来ほとんど変わっていなかった。電気も無線もなく、時計もミシンも化学薬品もなく、車も自転車も、それどころかおよそ車輪のついた交通手段というものを彼らは持っていなかった。」(同、18頁)。

注2: ダダバエフ『社会主義後のウズベクスタン』(アジア経済研究所、2008年)は、HDIの95位のウズベクスタンの事例。

注3: グローバル化の遮断とフィルター機能については、河合「ヒマラヤ南面・ブータンの国民統合と農村開発—農耕文化と高地文明—」(『ヒマラヤ学誌』10号、2009年)参照。



写真1 陸封からの脱却：空路の維持

## ■Data Base■

### 連載「インド北東部における植生に刻まれた歴史」5.

#### 焼畑に育つ高血圧の薬

小坂 康之 (総合地球環境学研究所)

タロ村は、ジョラムから10 km 西側に離れた、標高1300 mの山腹にある。この辺りの山には、ニシ族の焼畑が広がる。ところどころに残されたシイの木立が、かつての深い森の面影を残している。最近ではアパタニ族に習って、水がかりの良い谷間には棚田が拓かれ、その周囲には竹林が造成されている。

タロ村在住のタビア・タッド氏(49歳、ニシ族)の案内で、焼畑を見に行ったら、薄暗い山道を行くと、直径15 cmほどの木の幹を組んだ、人の肩に届く高さの柵につきあたたった。この頑丈な柵は、焼畑の農作物がミトウンやヤギに食べられないように守るためのものである。

柵にかけられた梯子をのぼると、100 m四方の日当たりのよい斜面に育つ、複数の作物が目に入った(写真1)。一番丈の高いものはトウモロコシである。3 m近い茎には、実が太り始めている。2 mを超す支柱にヤムイモの葉が覆いかぶさっている。そして、シコクビエが畑の一面を覆っていた。

柵の内側に入り、シコクビエをかき分けながら進むと、動物の尻尾のようなアワの穂や、白い粉をふいたシロザの葉も見える。シコクビエが生育していない所には、カボチャやキュウリ、トウガラシ、ナス、ササゲが植えられていた。この畑は、2月に森を伐採し、3月に火入れして拓かれた。シコクビエは5月に播種された後、11月に収穫されるという。

ところで、焼畑の産物は、これらの栽培作物だけではなかった。タッド氏は、シコクビエの合間にぽつりぽつりと姿をみせる低木から、ハート形の大きな葉を摘んだ。この植物の名前は、ニシ語で「ポト・オー」という。野生であるにもかかわらず、葉が食用となることから、「オー(野菜)」と呼ばれるそうだ。焼畑で栽培作物に混じって生えても、雑草として除去されることはなく、それどころか大事に保護されている。興味深いことに、この植物を食べると高血圧が抑えられるという。インド北東部の薬用植物の本にも、高血圧症への効能が記載されている(Sharma, 2005)。モンスーンの季節に白い花を咲かせるこの植物は、クマツヅラ科のクサギの仲間である。

ひとたび覚えると、とたんにあちこちで見つけるようになるものだ。このクサギは、標高2000 mまでの焼畑や草地に自生するだけでなく、民家の庭先に山採りの苗が移植されていた。そして、ダボリジョのタギン族には「タピン」、ジェンギンのミニョン族には「ロンゲン」、アロ

ンのガロ族には「オイン」と呼ばれ、野菜として食べられるだけでなく、高血圧の薬として認識されていた。

その後、アロンの知人の家で、クサギの若葉のおひたしをご馳走になった。香辛料の効いた料理と一緒に食べても、口の中に苦みが残った。ちなみに、このクサギは、アッサム語では「ティタ（苦い）・パッター（葉）」という。「良薬は口に苦し」と言うけれど、この「苦い葉」の効き目はどのくらいだろうか。

(参考文献)

Sharma S. N. 2005. The herbal flora of Assam and North-eastern India. Spectrum Publications.



写真1 2009年8月7日。タロ村の焼畑の景観



写真2 2009年8月7日。タロ村の焼畑で、シコクビエに混じって生育するクサギ。

■Health and Life■

ロサルフェスティバル

石本 恭子（京都大学大学院医学研究科）

チベット仏教を信仰している Monpa の人々にとって、ロサルは新年を祝う一年で最も大切な行事である。2010年は2月14日がロサル初日（正月にあたる）であった。滞在していた Hotel Dirang Resort でも新年を迎える準備が行われた。Dalai Lama の写真を置いてある棚には、果物、カプセ（小麦粉をこねてねじり棒にして油で揚げた菓子、甘くない）、花、バターで作られた飾りなどがいつも以上に飾りつけられていた。日本でいう大晦日にも何か特別なことがあるのかとわくわくしていたが、夕食はいつも通りカレーで特別なことはなかった。

翌朝5時半にドアをたたく音で起こされた。ドアをあけるとニコニコしながら「タシデレ」（ここではおめでとうという意味）と、宿で働いているソナムさんとシータさんがロサルの特別な器を持って立っていた（写真1）。ソナムさんが左側にいれてある米粉を親指で私の額に少量を押し付けて、肩にふりかけてくれた。右側のツァンパ（大麦、バター、砂糖のねったもの）を少量食べるように勧められた。一つまみ食べると黄粉もちのような味でおいしかった。シータさんがアラを手のひらに注いでくれ、それを飲んだ。清めの儀式なのであろうか、ロサルの期間は、どこの家庭に行っても同様のことが行われる。朝食前から特別な料理が出された。赤米（この地方でとれるお米なので現地ではローカルライスと呼ばれている）で作られたお粥をいただいた。日本と同じお粥と思いきや、チーズ風味のお粥でイタリア料理のリゾットに近いが、ヤクのチーズで料理しているのでブルーチーズのようなおいが何とも独特である。朝食の時間になると、マルチャン（どぶろくにバターが入ったお酒）、バター茶、ラーメンのようなトゥクパ（この日は手作りの太い小麦粉の麺？）、カプセ、果物などお正月のスペシャル料理が並んでいた。宿のおかみさんの家族やソナムさんたちと一緒に新年を祝い、今年二度お正月を祝い得た気分だ。町の様子を見に出かけたが、家で家族とロサルを祝っているのだろうか人数は少なかった。

翌日は Namshu 村に出かけた。Namshu では、15日間ロサルを祝う。ゴンパ（寺）やチョルテン（チベット仏教の塔）がある様々な場所でピクニックは催される。ピクニックは、繰り返し行われ家族単位や集落単位など集まるメンバーや場所は日によって異なる。ピクニックの最初に行われるのは、古いパン（チベット仏教の赤・青・黄・緑・白の旗）を外し、新しいパンに皆で取り換える（写真2）。作業が終わると宴会が始まる。食事や飲み物

は、各家庭から持ち寄りである。高齢者や村の主要な人物を中心に大きな輪になって座り、お酒を注ぎあったり、おしゃべりをしたりする。歓談がしばらく続いた後は食事の時間で、白米や赤米に地元の料理であるチュラカムタン（チーズ・納豆・野菜などの煮込み）を食べる。食後には、モンパの伝統的ダンスを皆で手をつないで踊るのだが、同じようなダンスを長い時には2時間くらい続き、日が暮れる前に解散となる。夜にはバンチャン（宴会）が行われ、毎晩どこかの家から歌声や笑い声が聞こえていた。

ロサル（Lhosar）の時期には、軍隊や学校に行ったりしている若者たちが村に帰ってきて、家族や友人とともにロサルを楽しむ。そして、彼らが村を離れる時には必ず年長者や家族に、「明日から行ってきます。」と挨拶して村を後にする。Monpaの人にとってロサルは新年を祝うと同時に、家族と一緒に過ごす大切なお祭りでもある。



写真1 アラ（地酒）を持っているシータさん（左）と新年の飾りを持っているソナムさん（右）



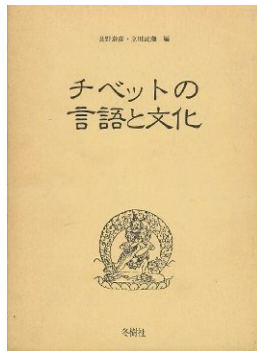
写真2 旗を付け替える Namshu 村の人々

## ■Books■

長野泰彦・立川武蔵（1987）『チベットの言語と文化』。冬樹社，6000円。

安藤 和雄（京都大学・東南アジア研究所）

インド北東部を理解するためにはチベットないしチベット文化に関する総合的な知識は不可欠である。しかし、残念ながら、チベットというキーワードでアマゾンの検索をかけてみても日本語でかかれたチベットの概説書は、旅行人が出版している「チベット—全チベット文化圏完全ガイド（旅行人ノート）」がヒットしてくるだけである。チベットに関する日本語で読める概説書はきわめて少ない。こうした状況は、本書が出版された昭和62年（1987）当時からかわっていない。本書は、東京外大名誉教授北村甫氏の停年退官を記念して関係者によって編まれている。私はチベットが専門ではないので、北村氏の業績について言及できる力はないが、本書の紹介によれば、同氏はチベット語方言やタマン語の記述研究に優れた成果を残された。本書では、14の章が、風土と歴史、言語、宗教、学藝の4編のもとに配置され、最後に30ページに及ぶ参考文献の編がつけられている。執筆陣は、風土と歴史には、「チベットの自然と人」（栗田靖之）、「中央アジア史の中のチベット」（森安孝夫）、「チベットの歴史」（山口瑞鳳）など私にも馴染みのある著者が論考を寄せている。当時のチベット学の水準を示すチベット民族文化概説ならびに信頼すべき参考文献ブックとしての機能を果たしていると自負する「高度な入門書」となっていると、本書のまえがきに述べられているように、15人のチベット関係の研究者が力をこめて各章を執筆している。本書が出版されて20年以上が経過しているので、各専門の分野では相当な研究の成果の積み上げがなされたことだと思うが、本書の目的であるチベットの学術的な総合入門書として役割は今も色あせてはいない。言語に関する知識に乏しい私にとっては、多少煩雑さを覚えたが、本書の言語に関する編の「チベット語の変遷と文字」（西田龍雄）や「チベット語の方言」（西義郎）の章は参考になる。ただし、チベット仏教に関しては本書が出版された以降、高野山大学関係者など中心にバンラデシュ、インド、インドネシア、ネパール、ブータン、チベット地区での現地調査が進み、それらの成果が次々と著書として刊行されているので、それらの本をあわせて読む必要があるといえるだろう。とはいえ、チベット民族文化に強く影響を受けているアルナーチャル・プラデシュやブータンなどに興味をもつ入門者にとって、本書が恰好の手引きをしてくれることは間違いない。



## ■Opinion■

### チベット文化圏紀行—西チベット，スピティ地方

奥山 直司 (高野山大学)

インド北部，ヒマーチャル・プラデーシュ州の州都シムラー（海拔約 2200 メートル）から山岳道路を東へ，北へと進んでサトレジ川の峡谷に分け入り，断崖に鑿で彫りつけたような道を上流に向かって車を走らせてゆくと，次第に乾燥が強まり，全山を覆っていた緑がみるみる減って，むき出しの岩と砂礫の山沙漠に変わってゆく（図 1）。これに呼応するかのように，チベット語の経文が印刷されたタルチョと呼ばれる旗が現れて，ここがチベット世界の入口であることを教えてくれる。



図 1

2010 年 9 月，筆者は，科学研究費補助金基盤研究（B）「ヒマラヤを越え河西回廊に伝わった密教的造形と表現，その表象芸術に関する研究」（代表・服部等作広島市立大学教授）による研究グループの一員として，シムラーからキナール地方を経て，スピティ地方に入り，チベット仏教の寺々を調査した。これらの地方は，われわれの当面のフィールドであるアルナーチャル・プラデーシュ州西北部とは，ネパール，ブータン，シッキム等を挟んで対称的な位置にあり，気候風土も歴史も大きく異なっているが，同じチベット文化圏の一部であり，その研究

はアルナーチャルの文化相の把握にも役立つものと考えられる。以下では，この地方の諸寺院を紹介したい。

ヒマーチャル・プラデーシュ州のキナール，スピティ，ラホール，そしてジャンムー・カシミール州のラダック，ザンスカールの谷々は，広大なチベット文化圏の西縁を形作っている。この地域は，隣接する中国チベット自治区のガリ（阿里）地区等と共に，文化的には西チベットとして一括される。

中央チベットのヤルルン溪谷に発祥した古代チベット王国（中国名吐蕃）がこの地に勢力を伸ばしたのは，ソントエン・ガムポ王（581-649）時代の 7 世紀前半からである。9 世紀前半にこの王国が崩壊した後，10 世紀初めに王家の血を引くキーデ・ニマグンが中央チベットから西チベットに亡命して，マパム・ユムツォ（マーナサローワル湖）西南のプランに定着し，やがてその勢力を西チベット全土に拡大した。彼はその領土を三分して，三人の息子，すなわちラチェン・ペルキグン，タシーグン，デツクグンに相続させた。これがガリ・コルスム（ガリ三国）である。この三国の領域については諸説あるが，『ラダック王統史』によれば，それは，ルトクを東の国境とするマルユル（ラダック）とグゲ・プラン，そしてザンスカール，スピティ，ピチョク（ラホール？）の一带である。西チベットの仏教は，このガリ三国時代以来の伝統を持つチベット仏教である。

図 2 はキナールのプー・ゴンパ（寺院・僧院）である。この寺はリンチェンサンポ（958-1055）によって開かれたと伝えられている。ただし，現在の堂宇は，1975 年にこの地方を襲った地震によって旧堂が大きな被害を受けた後の再建で，古いものは残っていないように見える。

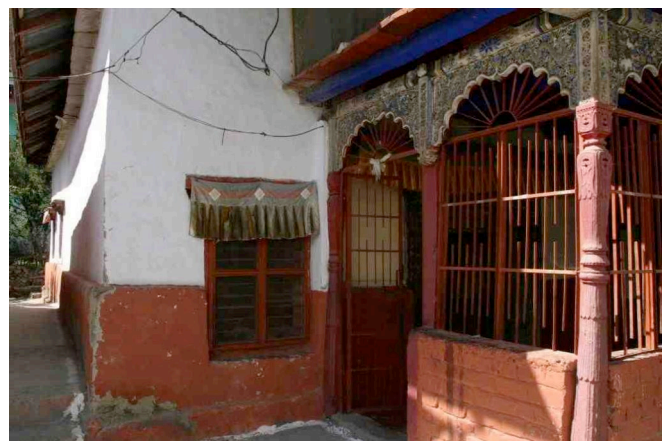


図 2

リンチェンサンポは 10 世紀から 11 世紀にかけて西チベットで活動した学僧である。彼は，グゲ・プラン王家のララマ・イエシェーウー（タシーグンの子）によってカシミールに派遣されて仏教を学び，帰国後，イエシェーウーとその後継者たちの支援を受けて，仏典翻訳，造寺・造塔などの活動を精力的に展開した。西チベットの文化的基盤の形成は，彼と彼の後援者たちによる仏教振

興事業によるところが大きい。彼らの活動は、古代チベット王国崩壊以来衰退していた中央チベットの仏教復興にも大いに寄与した。

スピティ地方の入口にあるナコ・ゴンパ（図3）もまた11世紀前半にリンチェンサンポによって開かれたと伝えられている。この寺のロツァーク（翻訳官＝リンチェンサンポ）堂には、懸け仏形式で造られた金剛界の五仏の塑像やカシミール様式のマンダラ等の壁画が見られる。それらの年代は、創建時よりもやや後と見られる。



図3

スピティ地方の仏教の中心はタボ・ゴンパ（図4）である。タボ・チューコルと呼ばれるこの寺の主要な伽藍は996年に創建されたとされる。タボ・チューコル内の諸堂はいずれも見どころが多いが、なかでも本堂（ツクラカン）の内部は、カシミール様式で描かれた一大壁画群、金剛界37尊中33尊の懸け仏、四面四体の大日如来像（図5）など、「ヒマラヤのアジャンター」というこの寺の異名に恥じない貴重な文化財で満たされている。ツクラカン奥の回廊に囲まれた仏堂に祀られた仏像は、阿弥陀仏と言い習わされてきたが、近年の調査・研究によって胎蔵大日如来である可能性が指摘されている。

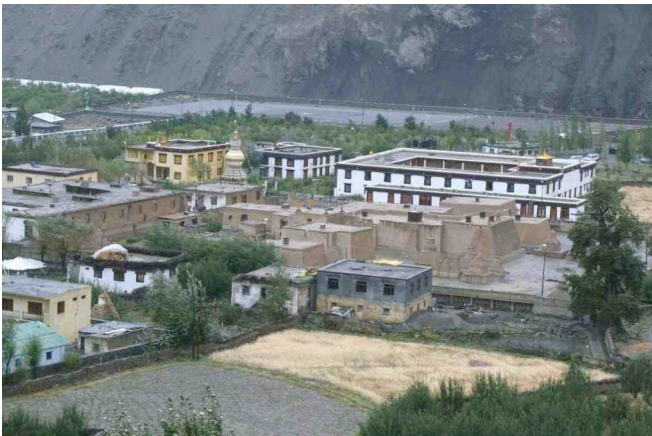


図4



図5 四面四体大日如来坐像（D.E.Klimburg-Salter, *Tabo: a Lamp for the Kingdom*. Milan,1997 より）

図6はスピティのカジャに近いキー・ゴンパである。この寺もまたリンチェンサンポの開基が伝えられているが、伽藍自体は後世の建築物である。



図6

他に、スピティ地方の主要僧院として、ラルン、ダンカルなどが知られているが、降雨・降雪と道路事情のために訪れることができなかった。

総じて、西チベットの仏教はタワン・西カメンの仏教に比して遙かに長い歴史を持っている。逆に言えば、アルナーチャルへの仏教の伝播は、この地が西チベットよりも遙かに中央チベットに近いにもかかわらず数百年遅れたのである。その理由については、ヒマラヤ地域へのチベット族の移住や中央チベットの政治・宗教情勢などと絡めて多角的に検討されなければならない。